

# 社会的訓練



山下俊郎

話が少し古くなるが、わたくしの孫達二人——上が男  
児で下は女兒——は、一九六〇年の秋から一九六一年の  
夏まで約一年間、その父親がアメリカのハーバード大学  
に招かれたので、ボストンに住んで生活していた。その  
上の男の子は、ちょうど日本で一年生に入学して一学期  
を終ったところで、アメリカへ行つたわけであるが、む  
こうの学年は秋九月から始まるので、ちょうどむこうの  
一年生の新学年に入学した。そして、翌一九六一年の夏  
七月に一学年を終つて、九月に両親および妹といっしょ  
に日本へ帰つてきた。

このむこうでの一年間の生活の中でいろいろとおもし  
ろい話題があつて、手紙が来るたびごとに笑わされ  
り、感心したりすることが多かった。とくにおもしろい  
のは、こちらで別に英語を習つて行つたわけではないの  
に、突然小学校に入ったのであるが、彼は子どもなりに  
結構むこうの生活に適応してゐたことである。ことばは  
不自由だが、数字で勝負する算数では優秀な成績をとつ  
た。しゃべることはやはり苦手だったらしいが、これも  
ある程度うまく適応してゐたと考えられる。この子が学  
校で習つたという唱歌を歌つてゐるのをどう聞いても、

「グッドモーニング、ヤロベ―」というのだといってが  
んばるので、父親が学校に行つて先生から本を借りて来  
てみたところ、それは「Good morning, yellow little bird」  
という文句だったという手紙には、家中おもわず大笑い  
したことであった。彼はけっこう大きな声を出して「グ  
ッドモーニング、ヤロベ―」で通していたわけである。

× × ×

このようないろいろの話はおもしろいのであるが、今  
日ここに取りあげてみたいのは、わたくし達のいう社会  
的訓練の面のことである。

それは一年のアメリカの生活を終つて、彼らが船で日  
本へ帰つてきた日のことである。一九六一年の九月のこ  
とであるが、わたくしたちは、彼らの帰りを横浜まで迎  
えに行つた。親戚のもの十数名が迎えに行つたわけであ  
るが、帰国した家族親子四人は早く上陸した。しかし、  
荷物を揚げるのに手間どるので、時間も昼の時間になつ  
て、一同で伊勢崎町へ行つて食事することになった。あ  
るレストランへ十数人のものが入つたのである。

あいにく広い部屋がなかったので、少々きゅうくつな  
部屋に一同が席を占めたのであるが、その部屋の中で  
ことである。ちょうど孫がお手洗いにいくというので、  
一番奥に席をしめていた彼は、何人かの人の後を通り抜  
けなければならぬことになった。そして、一人ひとり  
の後を通り抜けたのであるが、その一人の後を通るた  
びに、彼は何やら口の中で「コンソツ」と言いながら通つて  
いるのである。そこで、次の人の所を通る時に耳をよく  
すまして聞いてみると、彼は後をぬけるたびに「エクス  
キューズ・ミー」（ごめんさい）といちいちいいながら  
通つていたのである。

このことに気がついてわたくしはすっかり感じ入つて  
しまった。おそらく日本の子どもでは、小学校二年生の  
男の子にこのようなエチケットは身につけていまいと思  
つたからである。こういったような公衆生活の場面の  
におけるエチケットを、彼はおそらく一年間のアメリカ  
の学校生活の中で自然に身につけてしまったものと思わ  
れるのである。学校でのふんい気というのが、服装など  
についてもかなりやかましいらしいが、それは孫の場合

には要求しないということを入学の最初に先生が父親に

話したということなどから考えても、アメリカ東部の学校でのこのような社会的エチケットはかなりきびしいし

つけがなされてきたと察せられる。しかも、それがみんな子どもたちの身についたものになっているために、孫の場合でもきわめて自然に、むこうの子どもたちの中に一年間生活することによって身についたものになったのだと考えられるのである。いわば、そのようなエチケットの水準というものが、その学校（公立学校である）に子どもを通わせている家庭におけるしつけによって作られた水準であり、それらの家庭の生活の水準なのであると見られ、そしてその水準にある子ども達の学校生活の中に孫が生活することによってこのエチケットが身についたものになったのだと考えられるのである。

結局のところ、子どもたちの生活環境としての地域社会が、このような生活態度を規定すると考えられるのである。したがって、わたくしたちは自分の子どもこのような日常生活における生活習慣としての社会的生活態度の訓練における最も基本的な問題について、ここで考

えさせられるのである。

× × ×

わたくしたち日本人は、すでに終戦後十八年目になっているというのに、未だに古い生活からぬけ切っていない面が残っている。いわゆる社会生活、公衆生活の面におけるエチケットは、この残された面に帰しているのである。

わたくしたち日本人は、古い時代からの流れでいわゆる縦の道徳、君——臣、親——子というたてのつながりにおける道徳に關しては非常にきびしい考え方の中で、きびしくしつけられてきた。このこと自体はもちろん悪いことではないであろうが、これが横への道徳の無視ということにつながるから困るのである。つまり、たてにはやかましいが、横へのひろがり、すなわち社会に同時に生活している人々への迷惑というものにまるで無関心という結果をひき起してきているのである。

このような考え方は、生活に対する過去の考え方の中にいくらでもその例を見ることができるといえる。人をおしのけ

て、自分だけぬけがけの功名をしようとす立身出世主義的考え方というものは、いわば家族的利己主義といていいものである。そして、その一面「旅の恥はかき捨て」などという考え方は、同じ社会に一しょに生活している隣人であっても、その人々に直接面識がなければ、どんな迷惑をかけてもかまわないといったような意識がその底に流れているのである。このような考え方からひいて、たとえば楽しいレクリエーションの地であるべき山や川が、きたならしい紙くずのすて場であったり、きれいであったら快いはずの電車や汽車の中がまるでゴミ捨て場と同じであったりするのである。

× × ×

今日、わたくしたちは幼児保育の領域において、いわゆる社会的訓練ということに重きを置いている。それは、彼らの作るべき明日の社会が、みんなで助け合い協力し合い、楽しい社会であることを期待するからである。民主的社會人を作るといことが今日の保育の目標である限り、社会的訓練ということは絶対に欠くことの

できない事だからである。

このような社会的訓練は、どのようにして幼児に行なわれるべきであろうか。いうまでもなく、いろいろのほたらきかけが、幼児に対して行なわれなければならない。しかし、それらのほたらきかけ、いわば直接子どもにむかつて発するわたくしたちの注文よりも、その基底に横たわるべき基礎工作がある。そしてそのような基礎工作は、相手が幼児であるところの幼児保育においてこそ大切な意味をもっている。

それは、すでにさきのアメリカの子どもの場合について言ったような子どもの生活する生活の場の水準の問題である。この水準が、そのままに子どもたちの生活の上にもたらされることが、社会的訓練の基礎になるのである。

わたくしたちおとな、そしておとなの作っている社会、これがまず整えられなければならない。おとながまず社会的訓練を身につけることが、何よりも大切である。それができれば、幼児も正しく成長するのである。

\*

\*